

明治国家のプランナー、 渡辺洪基

（外交、政治、教育で手腕を発揮）

渡 辺洪基は、幕末の福井藩から東京府知事、次いで帝国大学（東京大学）初代総長に就任したことで知られる人物です。

洪基は、府中（現在の越前市）の町医、渡辺静庵の長男に生まれました。藩校、立教館で学んだ後、福井で医学や漢学を学び、江戸に出て佐倉の蘭学者佐藤舜海に師事します。その後、慶応元（1865）年から、福沢諭吉の塾（後の慶應義塾大学）で洋学を学びました。

諭吉との間でこんな逸話が残っています。諭吉の塾で正月、故郷に帰らない塾生が集まっていた時、雑煮を食べたいと誰かが言い出し、洪基が餅を調達することになりました。



渡辺洪基（個人蔵）

幕末の混乱期で、餅の入手も困難でしたが、洪基は「俺に策がある」と短刀を取り出し、部屋を出ていきました。皆が、強盗でもするのではと心配する中、洪基は笑いながら「先生の家の床の間の鏡餅の後ろを切り取ってきた。前部さえあれば足りる」と話したといひます。諭吉の妻が気づき、諭吉が塾生に問い質したところ、洪基の仕業であることが分かり、

諭吉は笑って諫めたそうです。

その後、洪基は、医を捨て、政治の道を歩むことを決意。「優れた医者は国の有様を診察し、その行く末を治していくものだ」とその気持ちで語ったといわれています。洪基は、英語ができたことが幸いして、明治3（1870）年に外務省に入り、翌年、岩倉遣外使節団に随行。帰国後、外務官僚としての歩みを進めました。

明治18（1885）年、洪基は東京府知事に就任します。就任直後に東京を襲った大洪水に対し、直ちに被災地に赴き、流失・破損した橋の架橋・修理を早急に進めるなど復興に力を注ぎました。現地を自分の目で確認し、対策を講じるやり方は、被災地住民に大きな安心を与えたといいまます。

また、東京にも外国の都市のようなマークが必要だと提案。明治22（1889）年に洪基（当時、東京市参事会員）が提案し決定されたマークは、今も東京都の紋章となっています。



東京都紋章

明治19（1886）年には、帝国

大学の初代総長に就任。伊藤博文首相など政府首脳は、初代総長は空理空論を唱える学者ではなく、行政手腕と実行力を備えた者がふさわしいと考え、洪基を推したといわれています。洪基は、就任後、貧しい学生への学費支援を企業等に要請。就職を約束しての学費貸与という提案に、企業等から卒業生の数を超える申込みがあったといひます。

その後、洪基は、貴族院議員などを歴任。多彩な分野で能力を発揮し、日本を世界水準に押し上げたその歩みは、『明治国家のプランナー』と評されています。

関連史料・ゆかりの地

武生公会堂記念館



昭和4（1929）年に武生公会堂として建設されました（国の登録有形文化財）。1階では常設展で越前市の歴史を紹介。2階では、特別展を開催しています。

【住所】越前市蓬菜町 8-8（JR 武生駅から徒歩5分）